

学生相談室に相談したかったが相談できなかった経験の径路

- TEMによる大学生の語りの分析 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
弦間 亮

1. 問題と目的

学生相談室に対する学生のニーズが決して少なくないにもかかわらず、実際には学生相談室が十分に利用されていないという現状がある。学生相談室に相談したいのに相談しないという学生は多く、その背景にあるメカニズムを解明することが求められている。本研究は、方法論として複線径路・等至性モデル(TEM)を採用し、学生相談室に相談したかったが相談できなかった経験の径路を視覚化することを目的とした。

2. 方法

調査協力者は、事前アンケートにて選出した、利用悩み経験のある学生3名、利用経験のある学生4名、計7名である。半構造化面接を行い、学生相談室に相談したかったが相談できなかった(あるいはした)経験を時間的経緯に沿って尋ね、分析の対象となる語りデータを収集し、TEMにより分析した。相談の試みの繰り返しというこの経験の特徴に着目し、「抵抗小・利用型」「抵抗大・あきらめ型」「躊躇・利用型」「躊躇・あきらめ型」の4類型を導き出した。そして、各類型の径路を視覚化し比較することで、学生相談室利用を大きく左右する分岐点について分析した。さらに、調査協力者7人分の径路をまとめて視覚化し、経験の総合的理解を目指した。

3. 結果と考察

<学生相談室に相談したい>という指向性を持った学生は、<学生相談室を利用する>という等至点へと向かうが、<学生相談室利用への相談に対する不安・不満の喚起>という社会的方向付けに行く手を阻まれる、というのがこの経験の基本的な径路である。本研究では、学生相談室の存在を捉える際の<学生相談室に関する間接的経験の参照>、他者の勧めの捉え方である<社会的ガイダンスの影響>、そして<積み残した問題への思い>という3つの分岐点が明らかになった。それぞれの分岐点において、学生相談室に関する間接的経験が肯定的に参照されること、社会的ガイダンスにより学生相談室への期待が増加すること、積み残した問題を根本的に解決しようと思うことが、社会的方向付けという壁を破り学生相談室利用に至る契機となっていた。

4. 全体考察

本研究では、学生相談室に相談したかったが相談できなかった経験の径路を視覚化し、援助要請プロセスの多様性を示すことができた。また、TEMにより結果的に相談を促す契機となっている要因や、最終的に相談を踏みとどまらせている阻害要因を明らかにすることができ、要因の重み付けを行うことができた。さらに、相談の試みを繰り返すという援助要請行動の特徴について、その繰り返しは個々の文脈の変化や繰り返しそれ自体の経験によってその質を変えるということを新たに明らかにした。